

ハイデガーの空間論

——生起する空間——

山本英輔

空間や場所は、私たちのアイデンティティと関係している。ある場所に慣れ親しみ、根づくことによって、その場所はかけがえのない価値や意味を帯び、「私」の一部となる。地域のシンボリックな樹木の伐採や建物の解体に対する住民の反対運動は、空間や場所が自分自身の一部であることの現れであるとも言える。空間は、認識の条件であるだけでなく、生存・実存の条件でもあり、さらに「私が私であること」の条件でもある。それにもかかわらず、いやそれゆえにこそ、空間をめぐる人びとは対立し、殺し合いにいたることもしばしばである。わが国では、近代化の過程の中で、土地に価格がつけられ、投機の対象となった。東京などの大都市では、今現在も、巨大ディベロッパーが同じようなタイプの超高層ビルを次々に建て、人や物を効率的に収容している。土地建物を手に入れそれを維持するためには、過重な労働が強いられる。しかし住宅難の問題よりももっと問わなければならない問題があると、ハイデガーは言う。それは、「住むことの本来的な困窮（die eigentliche Not des Wohnens）」であり、「住むこと」が人間存在の根本動向として経験されていないことである。人間は単に「生息」するのではなく、「住む」のである。ハイデガーの言う「住むことを学ぶ」とは、おそらくは「どのように住み、どのように空間を共有した明け渡すか」という「住むことの倫理」にもつながり、それは今日切実に求められているものではなかろうか。

ハイデガーの著書は『存在と時間』であって、『存在と空間』ではない。だが前期から後期へと思索が進むにつれて、空間への思索が深化するよう見える。これを時間に代わって空間が優位すると取るかどうかは解釈の分かれるところであるが、晩年の「現存在の空間性を時間性へと連れ戻そうとする『存在と時間』第70節の試みは、堅持されない」（SD24）という言葉は、存在を思索する上で空間が極めて重要な問題であることを示唆している。発表では、ハイデガーの空間に関する思索を、「空間論」と呼んで吟味しようと思う。（『Bauen Wohnen Denken』のもともとの演題は、『Mensch und Raum』であった。）だが彼の議論を「空間論」とひと纏めにくるには、コンテクストや位相が実に多様で錯綜しており、また空間に関連する用語も、Stätte, Ort, Gegend, Platz 等々夥しく登場し、なかなか困難を伴う。さらに、後期に語られる「詩人的に住む」や das Geviert についての言説を、いわゆる「ハイデガー研究」から離れてどう評価しどう生かしていくかとなると、戸惑いを覚えるのが正直なところであろう。

この発表では緻密な発展史的考察はできないが、『存在と時間』の空間性の議論から出発して、『Bauen Wohnen Denken』に代表される後期の空間論にいたる思想を、冒頭に述べた問題意識の中で、批判的に検討してみたい。ハイデガーの前期後期に一貫してあるのは、近代的な空間概念（均質で、中心を持たず、無限で、事物が存在するための「容器」「枠組み」）に対する批判で

ある（これは当然、近代建築や近代的な都市計画や土地開発への批判にもなる）。「空間性」の議論をはじめハイデガーの追究する空間は、確かにいわゆる「生きられている空間（der gelebte Raum）」とも異なる性格のものであるが、しかし「生きられている空間」と密接であると言わざるをえない。もっと言えば、それを可能にするものであろう。

近代的空間論を批判しながら展開するハイデガーの空間論の中でも最も重要と思われるのは、空間が生起するという捉え方である。Raum が räumen するという言い方をはじめ、空間的なものを動作の主体のように語る。明らかにハイデガーは、空間自体の力動的なあり方を思索しようとしている。『存在と時間』の ent-fernen と ausrichten の議論もそうである。このような空間が生起するという理解は、常識からすれば奇異である。なぜなら、私たちは通常、空間は固定したものであり、諸々の存在者の運動がなされる「器」のようなものと捉えているからである。しかし空間は、遠さと近さ、開放と限定、拡がりと集中といった仕方で力動的に生起するにちががなく、またそのように生起しなければ、私たちの前に広がっているものは、何かのっぺりとした、茫洋としたものになるであろう。私たちがある場所に根づいて深く帰属することができるのは、この空間の生起的性格があつてのことではないか。そのような予断をもって、考察と問題提起を試みてみたい。